

# 来日インタビュー

中国ロックの旗手が来日コンサートを

# 北京からの熱いメッセージ



## 崔健

ツイージェン

取材・文 橋爪大三郎  
撮影 石川徹

中国ロックの第一人者、そしてアジア最大級のミュージシャンとして、最近わが国のメディアにも名が挙がることの多くなった崔健が、東京・大阪・福岡でのライブ・ツアーのために来日した。近ごろ、通算三枚目のアルバムが日本・香港・中国大陸で同時に発売されるという偉業を携え、日本のファンの前に姿を現わした彼は、我々が味わうことの少なくなつた音楽が奏でる緊張感を叩きつけていった。普段語られることの少ない、中国ロックの可能性を探るのに、崔健のクロージング・アツプは重要であろう。

★  
いったん落ちた場内の照明が明るくなり、一曲目の「寛容」の演奏が始まると、ステージを取り囲むようにして待ちかねていた聴衆のあいだから、どつと歓声が沸きおこる。もうコンサート中盤といった盛り上がりだ。

ふつうのコンサートとちよつと違うのは、飛び交うのが中国語だということ。ステージの上からも「ここは北京かい？ なんて東京のみんなは中国語がこんなにうまいんだ」と、軽口で応酬する。中国ロックのスーパーヒーロー、崔健の東京公演初日の幕開けである。

その日、私は新宿の会場リキッド・ルームに駆けつけ、一四曲全部の演奏を心ゆくまで堪能した。日を改めて、一時間ほど崔健と話をすることもできた。彼は気さくに、質問に答じてくれた。中国の大地に足を踏まえ、世界に歌声を響かせているこの才能が、世界のいまをどう見ているのか、レポートしたいと思ふ。

● 音楽の原点に帰ろうとする  
● その真摯な姿勢

崔健のコンサートは日本で三度目。一回目（一九九二年は、ぴあ創刊二十周年記念の無料コンサートだった。私は横須賀まで聴きに行った。二回目は一九九三年の春、東京・八王子のアジアン・サウンド・ウェーブ・コンサート。これも、ほかのアーティストと抱き合わせだった。三度目の正直が今回の、初の日本ツアーである。東京で十月二十五、二十六日のツーステージ、そのあと大阪、福岡でもワンステージずつ。留学生ら古くからのファンに加えて、日本でのアルバム発売以後のファンも大勢押しかけ、どの会場もたいへんな熱気に包まれた。

一九八六年のデビュー以来、崔健の発表したアルバムは三枚だけで、決して多くはない。「無所有（俺には何もなし）」「解決解決」「紅旗下の蛋（ホールズ・アンダー・ザ・レッド・フラッグ）」いずれも九三年〜九四年にかけて、東芝EMIからまとめて発売になった。今回の来日コンサートは、最新アルバム（紅旗下の蚕）の発表に合わせた、記念ステージでもある。

● 崔健の生い立ちやロックとの出会いについては、別にインタビューをまとめておいたので、詳しくはそちらを見てもらおう（崔健一激動中国のスーパースター——岩波ブックレット）。今回は、新しいナンバーを中心に、彼の演奏ぶりを紹介してみる。

「紅旗下の蚕」が北京で発売されたのは、日本ツアーに先立つ八月中旬。十日も経たないうちに、例によってたちまち海賊盤が現われたという。私は事前にテスト盤を聴いていたし、「飛んだよ（飛了）」のビデオクリップも観ていたから、ある程度予想をつけていたが、それでもリキッド・ルームでの演奏は期待をうわまわる素晴らしいものだった。ふだんはもの静かな彼だが、いったん舞台上に立つ

と背筋を伸ばして、なにものをも恐れない果敢なロックンローラーに変身する。政治に対する、聴衆に対する、商業主義に対する彼のスタンスのとり方はなかなかのものだ。そういう潔さが彼のシャウトを通して、聴衆の胸に伝わってくる。

● どこからインスピレーションを得るのかという私の問いに、崔健は、テープからと答えだ。さまざまな音源を耳にすることで、創作への強い動機が湧いてくるのだという。ジャンルにこだわらず何にでも耳を傾けるという彼は、ロックという方法を自覚的に選んでいる。そして、オーケストラのトランペット奏者だっただけあつてか、アンサンブルに対する彼の感受性は卓越している。あるべき音のみが絶妙に組み合わさり、不要な音はひとつもない。ツイン・ドラム（片方は大太鼓とドラム缶の構成といい、劉元の吹くサククス&チャルメラの効果的な使い方といい、大胆なメッセージを伝えるのに相応しい、荒々しい音づくりだ。琴で参加するはずだった張珊がビザの関係で来日できなかったというが、そんなことを感じさせないほどの重厚な音づくり



はじめの「だいたいさぶらう」▼40年神奈川県生まれ、東京工業大学助教授。ポピュラー音楽学会会員。著書に「はじめの構造主義」「現代思想はいま何を考えればよいのか」など。

「ちょっと残念だったのは、崔健が喉を哽らして、高音の伸びがなかったこと。五曲目の『最後のうらみ』最後の抱怨』のサビの部分は、ゾクツとするような戦慄に満ちた節回しなのだが、こればかりはCDで聴いてもらうしかなかった。この曲は、ごく初期の作品に属するが、じつと温めながら改良を重ね、やっと今度のアルバムに収められた。崔健は、自分でも認めるように、寡作なうえにじつくり作品を練り上げるタイプなのだ。」

「中国の彼岸は日本。日本の彼岸は中国。国は違っても、こうやって音楽を通じて理解しあえる。直面する問題は違っても、いつの日か手をたすさえる日が来ると信じよう」

そんな語りかけて始まったアンコール曲「海を隔てて(彼岸)」が終わっても、聴衆は帰ろうとしない。拍手では足りず、足を踏みならしてのアンコールが続く。仕方なく崔健はアコースティック・ギターを手に取り、予定になかった「独り寝の娘(花房姑娘)」を弾き始めた。彼のソロに、ドラムスやキーボードがひとつまたひとつと加わっていく。そのプロセ

スガ、ギターの弾き語りからスタートしてバンドを結成し、ロックのスタイルを確立していった崔健の過去とダブって、印象深かった。「元の場所に戻ろうぜ(我郷要回到老地方)」というリフレインが、音楽の原点に立ち帰ろうとする彼の真摯な姿勢と重なった。

● 純粋に音楽だけで勝負できるから言葉の違いは問題じゃない

舞台がはねたあとのロビーの雑踏で、「崔健」の本が飛びように売れた。私は、自分の書いたものがあんなにもの凄い勢いで売れるのを見たのは初めてだ。やはり崔健はさすがだ。結局、東京と大阪だけで、用意した五百冊を完売したのだった。

あわたたしい公演日程をこなしたあと、崔健は東京でオフの日を過ごした。その一日を割いて、私のインタビューを受けてくれることになった。少し早めに東芝EMIのロビーに着いたら、崔健は、同じく中国の歌手・艾敬(アイ・ジン)「私の1997」がヒット中)と写真撮影の最中だった。ややあって、別室でややあまと旧交を温める。以下、大体のところをまとめておく。

● アメリカの初公演から帰ったばかりだった聞きましてくれ。

崔健 九月にシアトルの音楽祭に参加してふたつの会場で演奏した。

— 反応はどうでしたか？ アメリカではまだ、CDが発売前のはずだけど。

崔健 なかなかよかったです。中国の留学生も大勢来たり。テープもよく売れた。

— 『ニューズウィーク』に崔健さんの記事が載っていて、それを見たら、長春でコンサートをしたんですってね。最近、コンサートツアー「長征」のほうは順調ですか？

崔健 今年の前半は一回だけだったが、夏あとは新疆とか烟台とかぎっしりだ。新しいアルバムからの曲も受けがよくて、意外に思っている。周囲の音楽仲間には評判がよかったが、評論では賛否が分かれていたからね。

— 中国もこのまま経済発展が進むと、日本みたいに商業的な音楽ばかりになってしまうのではないかと心配だけれど。

崔健 日本にもいい音楽はいっぱいあるよ。十月二十三日に大久保の「サムデイ」っていうライブハウスに出ていた「カズ南沢&ブル

ースインターコース」はとても素晴らしかった。二十九日には京都の「ブルーノート」で「SOWHAT!」というバンドの演奏を聴いたけど、これもよかった。彼らはアンダーグラウンドで、有名じゃないかも知れないけど、とっても優れていると思ったなあ。大きなホールで照明や音響が立派すぎると、それをうまくやることはかなり注意が向いてしまつて、音楽がおろそかになってしまつて。そういうのは、いくら人気があつて有名なバンドでもどうしようもない。むしろ、カズみたいなミュージシャンが中国に来てくれたらいいのにと

……逆に聞くけど、日本の若い人たちは何を考えているのかな、最近？

— バブルの頃までは、政治とか経済とか、世の中の大きな動きは俺には関係ないや、みたいな感じだったんだけど、景気が悪くなつて何年か経つ、そうした動きが自分の生活に密接に関係があるんだと、やつとわかつてきたところだと思ふ。就職も思うようにはいかないし、このままだと若い人たちが、社会に対して忠誠心が持たなくて、どんどん厭世的になつていくような気がします。

● 崔健 なるほどね。

— 今度のアルバム「紅旗下的蛋」では、歌詞の比重が前より一段と高まっているわけですが、日本やアメリカの公演では、言葉が通じないぶん、言いたいことが伝わらないっていう感じがありませんか？

崔健 そんなことはない。俺の作品の場合、言葉の割合は二〇%位だと思つたので、大きな障害にはならないと思ふ。むしろ海外での公演は、純粋に音楽だけで勝負できるという利点もあるわけだから。

● 崔健は、弟の崔東さんが東京に留学していることもあり、かなりの日本通だ。来日のたびにCDを買い込み、情報を仕入れていく。インタビューが終わったあと記念撮影をし、いつの日かの再会を約して別れた。

● 思えば最初に崔健の音楽を耳にしてから六年、「紅旗下的蛋」のライナーを書いたり、本を書いたり、彼の手助けができるようになって本当に嬉しい。日本の人びとが彼のメッセージをしっかりと受けとめたなら、それに応えてまた近い将来、彼は日本に姿を見せてくれるに違いない。



崔健(ツイ・ジェン)  
1961年8月、軍楽隊のラッパ手の父と歌舞団の語り手だった母の間に生まれる。14歳のころから父についてトランペットを習うようになり、同時期に手に入れたギターで作曲も始める。その後北京交響楽団に所属するかたわら、いくつかのロック・バンドに参加。66年頃から、ソロでコンサート・イベントに出演するようになり、89年アルバム・デビュー。日本では現在、東芝EMIより3枚のアルバムが発売されている。